

[064_05/06] 経済学研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4369975>

出版情報：経済学研究. 64 (5/6), 1998-06-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

序

西村明教授は、1998年2月7日にめでたく還暦を迎えられた。九州大学経済学会は教授の還暦をお祝いし、還暦記念論文集を刊行することとなった。経済学部と同僚の他に、海外の共同研究者、西村研究室の卒業生である方々にも寄稿をお願いし、いまここにささやかな論文集が完成の運びとなった。

西村教授は、神戸商科大学を卒業後、京都大学大学院経済学研究科に入学、岡部利良先生に師事された。岡部研究室で研究方法を鍛え上げながら、まず不働費の研究を出発点に、シュマーレンバッハ理論を巡るドイツ原価理論の研究に打ち込まれた。1965年4月、大阪経済大学に赴任される頃から、米国鉄道会計、財務公開制度の研究に着手され、秘密と公開を巡る原理的及び歴史的視点から会計の制度問題を綿密に分析された。そして1971年4月本学へ赴任されてからは、その成果を独・英・仏さらには我が国の財務公開制度の分析に適用され、処女作『財務公開制度の研究』に結実されている。同書の持つ分析の緻密さとその射程の大きさには誰も圧倒されざるを得ない。

教授は会計学を専攻されながら、他方で大学院在学中から社会主義中国に対して尋常ならぬ思いを抱いてこられた。会計研究と中国研究という2つのベクトルは、当然に中国会計研究へと向かった。教授は、地道ながら、中国を丸ごと背負う気概を持って中国会計研究に没頭され、着実に前進を重ねられた。それは、中国が改革開放へと針路をとる1978-79年の時期に10年ほど遡る。その後、中国の生んだ増減記帳法をめぐる論争を契機として、北京商学院の研究者との学術交流が始まり、教授の中国会計研究は一層の深まりを示すことになる。1985年には早くも本学部と北京商学院、中国人民大学との間に相次いで学術交流協定が締結されるが、教授は、こうした中国研究者との研究交流を通して本学部の国際交流の先鞭を付けられたのである。中国会計史の世界的権威である郭道揚教授からの寄稿は、この交流の成果の一端である。教授の著書『中国企業会計の構造と分析』には、学術交流に伴う困難さと共に会計研究を通じた社会主義中国への言い尽くせぬ思いが込められている。

教授は120編を越える多くの著書・論文・報告書を発表されているが、その少なくない部分が大学の外での研究・調査活動の場で執筆されたものである。中国研究センターや国際東アジア研究センターでの教授の長きにわたるご活躍は、皆のよく知るところである。最近の教授の著作『環黄海経済圏交流への視座—九州からの発信』は、そういった場での研究・調査活動の成果であり、九州からのアジアへの優しい視線と学問への熱い思いを窺い知ることができる。

ニュージーランド留学（1993-94年）から帰国後は、教授は視野をアジア太平洋地域にまで広げられ、同地域での国際会計共同研究プロジェクトを実現されている。外国からのもう一人の寄稿者のウイレット教授は、この共同研究プロジェクトのメンバーであり、現在オーストラリア・ニュージーランド会計学会の会長をされている。現在、西村教授は学部長の激務を抱えながらも、仕事の合間を見て図書館へ足を運ばれ、大方完成している次の著作のために必要な詰めの作業に努めておられる。

西村教授は学問同様、スポーツをこよなく愛される。「学問は人」、つまり論文には人格が滲みでる、というのが教授の口癖であるが、教授のお仕事にはスポーツにおけるフェアプレーの精神が生かされているように思われる。九州大学経済学部が大学改革のうねりのなかで力強く進んでいかなければならない時だけに、学問とスポーツで練り上げられた教授が、健康を維持され、なお一層活躍して下さることを心より祈念する次第である。

1998年6月

九州大学経済学会長 福留久大
企業計算講座 大下丈平